俳句の英訳（長谷川櫂）

かれ枝に烏のとまりけり秋の暮　　芭蕉

芭蕉の句は明治以降、何人かの優れた翻訳者によって外国語に訳されている。Ｒ・Ｈブライスもその一人。その代表的な著作『HAIKU』第三巻に「かれ枝に」の句の英訳が載っている。

Autumn evening;
A crow perched
On a withered bough.　　Basho

ここで注目したいのは、第一に烏が一羽（A crow）であること。次に「秋の暮」（Autumn evening）が一句の冒頭に移されていること。芭蕉の原句は「かれ枝に烏のとまりけり」が先で「秋の暮」があとだった。ブライスはこれを英訳する際、「秋の暮」を先に出し、次いで「かれ枝に烏のとまりけり」（Acrow perched ／ On a withered bough）をおいた。なぜそうしたか。それはこの句の世界を正確に伝えようとしたからである。日本語の場合、回想の助動詞である切れ字「けり」の働きで、「かれ枝に烏のとまりけり」「秋の暮」という順であっても、秋の一日がとっぷりと夕暮れてきた、ふと気がつくと烏が枯れ枝にとまっているという意味になる。

ところが、英語では切れ字「けり」に相当する言葉がないから、もし原句のとおりの順に言葉を並べると、芭蕉が言おうとしたことは伝わらない。そこで「Autumn evening」から一句を始めたのではなかったか。